

神道フォーラム

ISSA : International Shinto Studies Association

Vol.49

神道国際学会会報
平成26年8月1日号

特定非営利活動法人 神道国際学会 〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F 電話：03-6805-7729 <http://www.shinto.org>

ご挨拶 神道国際学会会長 栗本慎一郎

平成25年は伊勢神宮および出雲大社においてそれぞれ特別の行事があり、多くの研究機関においてそのことの歴史的意味を考え、横断的な討論が行われました。わが神道国際学会においても秋に国際シンポジウムを開催し、他の学会より少し広く学際的かつ国際的な議論を深めたと思います。学際的かつ国際的ということは、神道研究ならびに神社研究これからもっと必要な視角というだけでなく、広く日本古代史研究および宗教史研究において今もっと必要とされているものであります。学際的に考えると、多くの学者が神道は日本固有のものという固定観念にとらわれすぎているのではないかと思う。天皇制といふのも同じでしよう。決してそう遠くない日に、神道も天皇制も文化人類学で言う「制度」として学際的かつ国際的に現在では思いがけないようなことでも比較研究されるようことが盛んに起きたのではないかと思います。たとえば、日本神話はおそらく伊勢と出雲の対立や連携という比較的新い時期（おそらくかだか5～6世紀のこと）でも天武天皇の権力構造の都合から説明したものがでないでしようか。ヨーロッパ重商主義期に王権側が唱えた王権神授説に通じるものがあります。王権神授説は王権内部からの自己説明です。王権神授説は王権内部からの自己説明です。王権神授説は王権内部からの自己説明です。王権神授説は王権内部からの自己説明です。王権神授説は王権内部からの自己説明です。

さて、このご挨拶を考えているころ、天皇家の若き女王が出雲大社の千家家に嫁ぐということが発表されました。印象的だったのは、長身で完璧な洋装の女王が悠然と記者会見に臨み、かなり畏まった感じの十五歳も年上の将来の夫に対しても不思議なことではありません。いやむしろそうであったことのほうが自然です。

したがって、再びたとえば、伊勢と出雲の問題は、単に儀礼の在り方のことだけでなく、日本歴史における王権（つまり天皇制）の性格を考える際の極重要な問題となります。言うまでもなく国譲り神話があるからです。これについては、諸研究機関の行った討論においても十分なものだったことは言えません。むしろ多くが問題点を隠ぺいしたという疑義があります。これが世界の歴史学会の

正直な歴史的評価になることだと思います。本学会のシンポジウムでも、準備期間はあまりにも短く、諸外国の優秀な研究者のお力を借りるにしても不足することが多くありました。しかし時間が足りなかつたことは当方の勝手な理由で、深く反省申し上げております。

この次の機会があれば、遷宮や遷座祭といった機会をとらえることにとどまらず、6～8世紀の天皇制確立期の意味とやはりそのころ確立しただらう日本文化の潮流の基本を考えるためにできればと思つております。それはもちろん世界の諸宗教の中の神道ということにとどまらず、世界の中の日本ということになるだらうことは間違いないありません。

世界各宗教団体によって構成される宗教的環境保全同盟（Alliance of Religions and Conservation : 略称ARC、本部・ロンドン）は六月一日から三日間、三重県伊勢市の神宮会館で国際会議を開催した。テークマは「未来のための伝統・持続可能な地球のための文化、信仰、そして価値観」。国連が、む

こう十五年を見越して策定する「持続可能な開発計画」の中に、宗教サイドの意見や貢献事項を盛り込んで、神指すもので、神道、キリスト教、イスラム教、仏教、ヒンズー教、道教など、世界各地の宗教リーダーら約百人が一堂に会した。開催主旨に沿って、国連からの代表者も参加し



最終日（三日目）のセッションにおける討議風景

わが神道国際学会も女王にならわせていただき、難しい問題にも常に泰然と、それでいて諸譲りを忘れず対処していきたいと思います。

「未来の地球のための文化・信仰・価値観」
宗教的環境保全連盟が国際会議
伊勢を会場に
神社本庁の全面協力で、

ARCの国際会合は折々に開かれており、今回は、「持続可能な開発」「地球環境の保全」などの論点に対し、神道を核とした日本の信仰や宗教が内包する価値観や思想性の場合、どう対応できるのかを探るため、神社本庁の全面協力（共催）のもと、神宮のお膝元である伊勢の地を主会場に選んだ。

初日（2日）の神宮会館での開会式では、まず神社本庁の田中恒清総長が挨拶し、各宗教がそれぞれに持つ伝統や価値に基づいて、互いに共存していく方

かれていたが、そこで、「持続可能な開発」「地球環境の保全」とした日本の信仰や宗教が内包する価値観や思想性の場合、どう対応できるのかを探るため、神宮会館での開会式では、まず神社本庁の田

中恒清総長が挨拶し、各宗教がそれぞれに持つ伝統や価値に基づいて、互いに共存していく方

かれていたが、そこで、「持続可能な開発」「地球環境の保全」とした日本の信仰や宗教が内包する価値観や思想性の場合、どう対応できるのかを探るため、神宮会館での開会式では、まず神社本庁の田



「自然環境シンポジウム」で講演する松長有慶高野山真言宗管長

彬子女王殿下が特別講演——日本人は自然を崇拜する感性を持つ

二日目（3日）には、神社本庁が主催する「式年遷宮記念・自然環境シンポジウム」が開かれた。ARCのメンバーのほか、全国の神職や氏子崇敬者ら多数が参加し、「人と自然が共生する国、日本」を主題とした講演とディスカッションを聴講した。冒頭、神社本庁総長の田中氏に続いて、神宮大宮司の鷹司尚武氏が歓迎の挨拶をし、持続性のある森林を確保するため、神宮が大正時代より継続している御

彬子女王殿下が特別講演——日本人は自然を崇拜する感性を持つ

二日目（3日）には、神社本庁が主催する「式年遷宮記念・自然環境シンポジウム」が開かれた。ARCのメンバーのほか、全国の神職や氏子崇敬者ら多数が参加し、「人と自然が共生する国、日本」を主題とした講演とディスカッションを聴講した。冒頭、神社本庁総長の田中氏に

彬子女王殿下が特別講演——日本人は自然を崇拜する感性を持つ

二日目（3日）には、神社本庁が主催する「式年遷宮記念・自然環境シンポジウム」が開かれた。ARCのメンバーのほか、全国の神職や氏子崇敬者ら多数が参加し、「人と自然が共生する国、日本」を主題とした講演とディスカッションを聴講した。冒頭、神社本庁総長の田中氏に

二日目には遷宮記念「自然環境シンポジウム」（神社本庁主催）も開く

（神社本庁主催）も開く

彬子女王殿下が特別講演——日本人は自然を崇拜する感性を持つ

二日目（3日）には、神社本庁が主催する「式年遷宮記念・自然環境シンポジウム」が開かれた。ARCのメンバーのほか、全国の神職や氏子崇敬者ら多数が参加し、「人と自然が共生する国、日本」を主題とした講演とディスカッションを聴講した。冒頭、神社本庁総長の田中氏に

彬子女王殿下が特別講演——日本人は自然を崇拜する感性を持つ

二日目（3日）には、神社本庁が主催する「式年遷宮記念・自然環境シンポジウム」が開かれた。ARCのメンバーのほか、全国の神職や氏子崇敬者ら多数が参加し、「人と自然が共生する国、日本」を主題とした講演とディスカッションを聴講した。冒頭、神社本庁総長の田中氏に

彬子女王殿下が特別講演——日本人は自然を崇拜する感性を持つ

二日目（3日）には、神社本庁が主催する「式年遷宮記念・自然環境シンポジウム」が開かれた。ARCのメンバーのほか、全国の神職や氏子崇敬者ら多数が参加し、「人と自然が共生する国、日本」を主題とした講演とディスカッションを聴講した。冒頭、神社本庁総長の田中氏に

彬子女王殿下が特別講演——日本人は自然を崇拜する感性を持つ

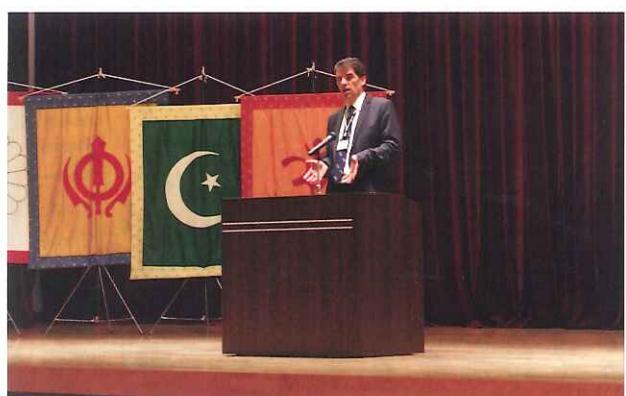
二日目（3日）には、神社本庁が主催する「式年遷宮記念・自然環境シンポジウム」が開かれた。ARCのメンバーのほか、全国の神職や氏子崇敬者ら多数が参加し、「人と自然が共生する国、日本」を主題とした講演とディスカッションを聴講した。冒頭、神社本庁総長の田中氏に

2

各セツシヨンで各國宗教者が意見出し合う

ショーベン国連特別顧問

「宗教者は国連の計画に
大いに協力を」



国連事務総長のメッセージを伝えるショーベン特別顧問

最終日（四日）には三つのセツシヨンが開かれ、国連の開発計画総裁特別顧問であるオラフ・ショーベン氏が、気候変動・貧困・平和の問題に対処するため国連が策定を予定している「持続可能な開発計画」に関し、「宗教者の協力」を要請して、「宗教者の協力」を受けた討議が展開された。

ショーベン氏は、バランスをもつて、高い意識と野心で、価値のある持続的な努力をする時には、信仰というものが大きな役割を果たすとし、「だから宗教者には大きな貢献を望んでい

る。行動のために慎重な検討を

お願いしたい。それが（国連の）潘基文事務総長からのメッセージだ」と語った。

▼シーケ教・マンティー氏
「聖地が存在する本来の意味を考えることが必要」

▼田中神社本庁総長
「木を植える。自然の持続のシステムがある」

ショーベン氏の発題を受けて、キリスト教の牧師や、シーケ教のリーダー、神社本庁の田中総長らが登壇。うちシーケ教のマンティー氏は「聖地は、そこにあるというだけでなく、その意味を我々の中に取り込んでいかねばならない。そして、つねにチェック機能というのも大事になつてくる」と主張した。

また田中氏は「形あるもの

のは必ず壊れるが、システムは継続させる。それが持続ということだ。我々は木

を植えつつ、自然のおかげで生活を続けさせていただ

いている。聖地・伊勢にござつて、その意味を再確認していただければ」と呼びかけた。

この後のセツシヨンでは、宗教的な価値に基づいて、今後、アクションプランを作っていくことを目指し

て、各宗教の考えを共有するため、参加者一人ひとりが意見を述べ合った。

律令制と斎宮、そして嵯峨祭

懸野直樹（野宮神社宮司）

一世一代の国家的行事である

斎宮群行、野宮の造営、斎宮の維持管理には多大な費用を要しました。租庸調に次ぐ、労役税

である「雜徭」で野宮造営に動員された人数も膨大です。三代

実録元慶七年条（八八三）によれば工（大工、石工）三千十五人、

夫（人夫）一万五百四十五人で、

畿内及び近江、美濃、丹波、但馬、播磨から動員されています。

一人が十日働くことになつてい

ますから、併せて延べ十三万五千六百人。彼らに与える食事だけでも二十七万千二百食（当時は一日二食が通例）になります。

一方、アフリカの宗教者からは「我々自身に自己犠牲の準備が備わっているだろうか。そこに気づき、特に物質主義からの交換に率先しよう」、また別の宗教リーダーからは「宗教家が何をやつしていくかを考えるときに

は、コミニティーと手を取り合つて進まないといけない」との見解が示されるなど、多くの発言が相次いだ。

最後にARCの事務局長のマーティン・パーマー氏から

「我々に期待されていることは何かをしっかりと捉え、アクションプランへと進んでいきたい」との言葉があり、今後の国際会合での具体的な討議へ向けて課題を浮き彫りにするかたちで、会議は終了した。



渡月橋をわたる神輿

また田中氏は「形あるものは必ず壊れるが、システムは継続させる。それが持続ということだ。我々は木を植えつつ、自然のおかげで生活を続けさせていただ

いている。聖地・伊勢にござつて、その意味を再確認していただければ」と呼びかけた。

この後のセツシヨンでは、宗教的な価値に基づいて、今後、アクションプランを作していくことを目指し

莊園が拡大し、不輸不入により

国司の権限が弱まる、予算の確保が当然厳しくなります。院

政期に入り、白河天皇の時には

河内国醍醐寺領への造野宮作

料米賦課が免除（醍醐雑事記）、

近衛天皇の時にも同じく醍醐寺領の伊勢国曾爾庄への「斎宮群

行雜事」が免除されますが、こ

れは一例に過ぎません。二条天

皇の斎宮であつた好子内親王は任が終わり帰京の際の不備に

より落涙すとあり（顯広王記）、

鎌倉時代の御嵯峨天皇に至つて

は「初斎院入り、野宮入りの予算に苦慮する」（壬生家文書）

ようになります。

建武の新政が崩壊すると斎宮制度も終焉を迎えます

が、野宮では勅祭が執行されます。

嵐山山中の藏王権現堂と嵯峨御所大

覺寺のラインを打ち切るよう龜山殿が足利尊氏により天龍寺に改変さ

れるように、南北朝のデモンストレーションが嵯峨の地で圧縮されるかのように行われます。

渡月橋をわたる神輿

この後、セツシヨンでは、宗教的な価値に基づいて、今後、アクションプランを作っていくことを目指し

た。そこで、まず第一回目の開催地として、京都の北山地区が選ばれました。嵯峨祭の稚兒は赤の衣冠で五位少将とされていますが、奉する稚兒は黒の衣冠を着用しました。祇園祭の稚兒は赤の衣冠で五位少将とされていますが、嵯峨祭が執行されます。また供

殿を渡つた）とあるように「嵯峨祭」が執行されます。また供奉する稚兒は黒の衣冠を着用しました。嵯峨祭の稚兒は三位中将に相当し、他には松尾祭以外に例はありません。嵯峨祭は衰微するたびに縁旨が出され（後奈良天皇他）、大覺寺宮門跡の庇護の下、他と愛宕神社の神輿が大覺寺に現在に続きます。今でも野宮神社と愛宕神社の神輿が大覺寺にかつて斎宮の時代には仏事禁断の地であった野宮が宮門跡の庇護を受けたのは、時代の流れと



大覚寺門跡の御法楽

十一年に一度の「式年神幸祭」 四千人が絢爛な歴史絵巻を展開——千葉・香取神宮



進発水上祭で人々に見守られながら御船に向かう神輿



津宮の鳥居のもとで御乗船の神輿を待つ人々

千葉県香取市の香取神宮（高橋昭二宮司）で四月十五、十六両日、十二年に一度の「式年神幸祭」が行われた。鶴首の御座船が利根川をのぼる水上渡御、歴史的町並の続く佐原地区を進む神輿行列……。王朝人や戦国武者などに扮した氏子ら約四千人が神輿に供奉し、総延長十五

キロを巡幸する絢爛豪華な歴史絵巻を繰り広げた。

約八百年前に始まつたとされる香取神宮の神幸祭。うち「式年神幸祭」は午年のみに斎行される、その「拡大版」だ。御祭神・経津主大神が東国を平定したときの様子を模した祭りとも言われる。江戸時代には途絶え

たが、明治に入つて復活した。



初日の朝、まず香取神宮で発

輿祭が執り行われ、利根川河岸にある津宮に向けて行列が出御した。昼前には津宮の鳥居の元で河岸御旅所祭があり、いよいよ神輿は御船に乗船。そして午後一時、進発水上祭とともに川をのぼり始めた。行列供奉の一

行は、御座船を右手に見守りながら、土手道をしずしずと歩いていく。

利根川で鹿島神宮からの「御迎祭」も

水上渡御のハイライトは、利根川を挟んで対岸方面に鎮座する鹿島神宮（茨城県鹿嶋市、鹿島則良宮司）の御船の出迎えを受ける御迎祭。神話では、経津

やがて、両船ともどもこちらの河岸に近づいてきたかと思うと、やおら鹿島の御船は、向こう岸へと帰っていく。鹿島神宮の神主らが船上に立ち並び、手を振つて別れを惜しんでいる。

香取の大神を乗せた御座船は、この後、市中心部の佐原地区を巡幸するため着岸し、御上陸の次第となる。行列を組み直した供奉衆は、国の「重要伝統的建造物群保存地区」にも指定される「小江戸」佐原の町並みを、歴史装束に身を包み、進行した。

市内中心部の御旅所に宿泊した神輿行列は、翌日（二日目）も朝から佐原地区を巡幸し、市内の諏訪神社や八坂神社などに立ち寄りながら、帰途に着く。午後三時すぎ、香取神宮に帰還。同四時から還御祭が執行され、境内を埋めた氏子らによる威勢のよい万歳三唱の晴れがましい

主大神（香取）と、武甕槌大神（鹿島）は、葦原中國の平定において力を合わせ、事に当たつた二大武神なのだ。

御迎祭は、川幅の広い利根川に突き出た牛ヶ鼻というところで斎行されるため、両神宮の御船が合流し交歓する様子は、遙か彼方に眺められるだけで、神事の詳細はよく分からぬ。



香取神道流の剣術を習う外国人らも凛々しい武者姿で供奉行列に参加した

声が神域にこだました。

五十の氏子地区が伝統継承に努力

「式年神幸祭」で大行列を組む約五十の氏子地区には、それに独自の陣羽織、あるいは武者甲冑、あるいは平安装束など、神幸祭のための着用物が伝わる。また、独特のお囃子、奉納芸能など、見せ物を継承する地区もある。

だが近年は、ここでも子供の減少、核家族化が進み、共同体

意識の希薄化は著しい。伝統を継承していく苦労は尽きないが、各町内とも、古式の受け継ぎに懸命の努力を続けている。それもこれも、總鎮守・香取さまの式年神事に奉仕していることへの誇り、そして神徳への感謝の念が、一致協力への高ぶりに向かわせているのだ。

文化の保存、地域の結束の大切さを、十二年ごとに再認識する——。そんなところにも「式年神幸祭」の価値はひそんでい



話題のこの人 京都「祇園祭」と山鉾町の今を捉える エリザベツタ・ボルク博士

国際日本文化研究センター外国人研究員

現代日本における宗教文化の諸様相を視野におさめながら、それらの社会との関係や繋がり、変容を分析・考究している。論文として「日本の都市社会における宗教性と世俗性のゆらぎに関する考察」「聖域リローデッド」——神道における最近の傾向などに続き、最近では「現代日本の宗教と国家」を発表した。

様変わりするコミュニティ、台頭するポップカルチャー、観光産業、そしてメディアの影響力……。「そういった様々な社会の側面と関わり合って、伝統的な宗教も変化し続ける。神道や仏教も例外ではないはずで、その変化が日本では、どういう傾向にあるかに関心を持つています」と話す。

最近の出版物『神道はどこへいくか』(石井研士編)、「渋谷の神々」(同編著)に対して書評を書いたが、それらの執筆も同様の関心から描き出した日本の宗教の「今」である。

都市の町屋コミュニティと、その構成員たる町衆の心性と生活に、千二百年もの長い間、密接につながり続けてきた宗教文化である。「祇園祭の山鉾巡行は、伝統を継承する努力を内包しつつも、観光やメディアといった近・現代的な要素にも強く絡んでいる。そしてまさに、共同体の現代の姿を見せてくれる」と睨んでいる。

今年の祇園祭(七月一日～三十一日)は、その長い歴史にあって、一つの大きなエポックを印す。都市事情や観光政策によって、ながらく前祭と後祭の山鉾巡行が一日に括られてしまっていたのが、四十九年ぶりに、十七日の前祭(十三基)、二十四日の後祭(十基)という「日にわたる従来の巡行形態が復活したのだ。

こうした祭の変遷にも留意しつつ、巡行する三十三の町内(山鉾町)の「今」を把握するため、実見と分析の日々を重ねてきた。調査手段としては「住民の思い、各町内会の現状を探るには、自らそこに飛び込んで、見て、聞いて、そして祭りの活動に加わってみるのが一番」として、鉾町会の主要メンバーらにインタビューを繰り返した。祭に向けた町内の活動やミーティングにオブザーバーとして顔を出し、さらには、山鉾

練り返した。祭に向けた町内の活動やミーティングにオブザーバーとして顔を出し、さらには、山鉾

練り返した。祭に向けた町内の活動やミーティングにオブザーバーとして顔を出し、さらには、山鉾

巡回で頒布する疫病・災難よけの「粽」を作る作業にも加わった。「その共同体が醸し出す雰囲気とか、そこで何が、どんな程度に動いているのかを肌で感じ、捉えることが大事なんです」

今秋には日本を離れるが、祇園祭の現状を一年にわたって考察した成果は、一、二年のうちに一冊の論著にまとめる予定だ。また、この八月には、スロベニアのリュブリヤナで開かれる国際学術会議でパネル「近現代日本の神道の諸相」を主宰するが、そこで個人発表でも、「祇園祭——今日の京都における神道と共同体」と題して研究成果の一端を提示することにしている。

（T.S.）

◇
国際日本文化研究センター(京都市)の外国人研究員として招聘されているこの一年間、研究対象として絞り込んだのは、京都の初夏を彩る八坂神社の祭礼「祇園祭」だ。

連載 神道DNA

『セントラルドグマ?』

金光教泉尾教会 総長／(株)レルネット代表

三宅善信

私がこの世に生を受けた1958年、自然科学の分野だけでなく宗教や哲学的価値観も含めて、現代の人類文明のあり方を決定づけるひとつの学説が、DNAの二重螺旋構造の発見者のひとりである分子生物学者フランシス・クリックによって提唱された。人呼んで『セントラルドグマ』すなわち「中心的教説」あるいは「根本原理」という、何人も名前を聞いただけで平伏してしまいそうな生物学界の「バイブル」である。

『神道フォーラム』の創刊以来継続しているこの連載のタイトルにも「DNA」という言葉が使われているくらい「DNA」という生命科学用語は一般化した。A・G・T・Cというたった四種類の文字(塩基対)によって記された暗号によって、地球上のありとあらゆる生命現象が先駆的に操作されているという、仏典や聖書やコーランですらも足許にも及ばない生物界の統一理論が記述された“聖典”的ページをわれわれ人類が聞くことができるようになったことの意味は、計り知れないほど大きい。だから、クリックもこの学説に『セントラルドグマ』というたいそうな名前を冠したのである。それほど画期的な発見であった。

昨秋に斎行された伊勢の神宮の式年遷宮もまたこのDNAと同じ戦略を用いて、現在ある社殿の隣に建物から調度品に至るまでそっくり同じものを再現してから、新しい社殿にご祭神をお遷しするという方法を20年ごとに行うことによって、悠久の伝統を現代に引き継いでいる。現在、京都の上賀茂神社(賀茂別雷神社)と下鴨神社(賀茂御祖神社)では、21年に一度斎行される式年遷宮の準備が真っ盛りであるが、上賀茂神社では、本殿の真横に、日頃は「空き家」となっている本殿とまったく同じ大きさで同じ調度品を揃えた権殿があり、本殿を修復する期間中も日々のお勤めを欠かさないために、ご祭神に暫しお遷りいただき、本殿の修復後に再度ご帰還いただくという少し変則な戦略を採用している。面白いことに、ごく一般的な神社の注連縄は三つ編みのような構造をしているが、上賀茂神社の注連縄はまさに二重螺旋構造をしている。

このように、『セントラルドグマ』の教説は、生命科学の分野だけでなくあらゆる分野において、半世紀間にわたって世界を睥睨してきた。ところが、最近、「生物の細胞は、全能性を有する一個の

受精卵からドンドンと分裂を繰り返していく内に個別の組織細胞へと分化してゆき、いったん個別の組織細胞となったものは元の多機能性を持った状態へ戻ることができない」と信じられてきたセントラルドグマ説を否定する形で、いったん組織細胞となった細胞も、特殊な方法によってリセットされると初期化され、その多機能性を復活することが可能であるということが判明してきた。いわゆる「ES細胞」や「iPS細胞」である。よく考えてみれば、将来、再度利用する予定がなければ、いったん個別の組織細胞となった細胞ひとつ一つの核内に、わざわざ全ての遺伝情報を記録したDNAを保有しておく意味がないのではないか。

上賀茂神社で面白い社殿を見つけた。本殿からみて権殿の反対側に「若宮神社」と呼ばれる社殿がある。一般的に、神社において「若宮」と呼ばれる社殿のご祭神は、本殿に祀られているご祭神の息子の意味である。例えば、八幡神社における「若宮」とは、「八幡神」であるところの誉田別命(応神天皇)の皇子、すなわち仁徳天皇を祀った社殿のことである。しかし、上賀茂神社における「若宮」とは、ご祭神である賀茂別雷大神の息子ではなく、賀茂別雷大神ご自身の「若いときの人格」そのものである。極限的な状況においては、成熟して道理を弁えた大人よりも、多少無謀に見えて、荒削りな若者のほうが突破できる場合もある。つまり、上賀茂神社の「若宮」とは「iPS細胞」のようなもので、いつでも若返ることができるのだ。こうしてみると、神道の世界観と最新の生命科学とは、本当に相性の良い関係であると言える。

2014年11月22日、国際神道セミナー 「キリスト教と神道との対話」を開催

今年度の国際神道セミナーは、「キリスト教と神道との対話」をテーマに、11月22日(土)の14:00～17:30に、東京都港区の聖アンドレ教会にて開催します。本セミナーの詳しい案内は、今秋、改めて皆様のお手元にお届けしますが、それに先立ち、今回のセミナーの意義について、本学会のマイケル・パイ理事に話を聞きました。

我々は今日、グローバル化した社会に生きています。ゆえに、特に経済・科学技術分野において、世界中で様々なものが共有されています。また、それだけではなく水や大気といった、より基本的な資源をも、我々は分かち合っているのです。日本人の宗教として育まれてきた神道は、しばしば国内の事象にのみ目を向けがちです。しかし、我々を取り巻く環境と同じく、今や自国だけでは存在することのできない複雑な世界に生きているということを忘れてはなりません。

宗教の役割とは、一般的には、人々に生き方の指針を与えることです。人々に畏敬の念を呼び起こし、秩序を与え、過ちを正すのです。ただし、すべての宗教が全く同じ神託を有しているわけではありません。されど今日、我々が同じ一つの世界に暮らす以上、多宗教間の関係について考えることは、もはや避けられません。宗教は互いに闘い、競わなくてはならない運命なのでしょうか？ それとも、指導者達や信者達は互いに学びあい、協力し合って、地球の問題を解決していくのでしょうか？

こうした問題意識のもと、近年、様々な宗教の間

でその代表者たちが互いの教義や経験について対話を始めています。ただし、これまでのところ、神道は、この種の宗教間対話において、あまり大きな役割を果たしていません。しかし、こうした対話は、将来のためになることは間違いないかもしれませんし、我々の子どもや孫の世代が、この互いに分かち合うべき世界の中でいかに生きていくべきかをより良く理解するのに役立つでしょう。

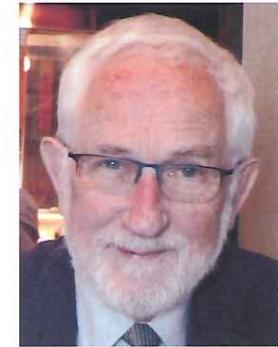
では、神道と他の宗教の対話をどのように促進していくべきなのでしょうか。ここで「宗教」というものが、それのみで存在できるものではないことを忘れてはなりません。宗教とともに、我々は人間にについて語るのであり、人間の生き様や、経験や、習慣について語るのです。つまり、最初にすべきことは「人々」を集めることなのです。その「人々」とは、宗教を代表する人かもしれませんし、宗教者ではない一般の人かもしれません。必ずしもそれが宮司や主教・司教など高位の聖職者である必要はないのです。いずれにせよ、人々に異なる背景をもち、これまでの人生経験も人々に異なる人たちが、この対話に参加することが重要なのです。

神道国際学会は、今秋、神道界とキリスト教界からそれぞれ講演者を招き、セミナーを開催します。どんなことが討論のテーマとして考えられるでしょう？ 従来の議論とは異なる、何かもっと前向きな進展が期待できるテーマを探さなくてはなりません。そのためには、神道とキリスト教、双方の多様な「経験世界」に関するテーマを選び、その話題に絞って意見を交わすのが一番です。ここで重要なことは、神道とキリスト教の「経験世界」は、まったく同一ではないにせよ、いろいろ重なり合う部分もあるということです。たとえば、自然環境のような広いテーマを取り上げれば、活発な議論が展開されるでしょう。また、「祈り」をテーマにすれば、これもまた建設的で独創的な対話が可能でしょう。これらのテーマはほんのいくつかのアイデアにすぎませんが、セミナー当日には更なる意見交換があり、興味深い成果を上げられるものと願っております。

2014年6月

マイケル・パイ

(神道国際学会理事・マールブルク大学名誉教授)



神社巡り③

三宅善信

金光教泉尾教会 総長／(株)レルネット代表

ひらさき 枚聞神社

鹿児島県指宿市開聞十町1366

日本本土の最南端とも言える薩摩半島の先端部の指宿には、いろいろと興味深い神社がある。ここから先は黒潮洗う奄美・沖縄といった西南諸島への「海の道」しかないという「地の果て」の地に、遙か海上にあるという「ニナイカナイ(=常世の国)」へのロマンを求める龍宮神社や、南海の「補陀落淨土」を想起させる熊野神社などという神社もあるが、なんといっても興味深いのは、薩摩半島の南部のどこからでもよく見える「薩摩富士」と呼ばれる開聞岳の北側の裾野に鎮座する「枚聞神社」である。

薩摩半島南部には、池田湖をはじめ「マール」と呼ばれる噴火口に水が貯まってできた円形の湖沼や湾入部を数多く見ることできるが、それはとりもなおさず、歴史を通じて何度も火山活動が繰り返されてきたことを示す。現在では、そのエネルギーを地熱発電や砂風呂といった形で利用しているが、古代の人々にとっては、いつ噴火するか判らない開聞岳は、恐怖と共に畏敬の念をもって拝されたであろうことは容易に想像できる。

周囲の山脈とは孤立した形で、かつ、東南西

の三方を海で囲まれて屹立する開聞岳の姿は、現代人が見ても神々しさを感じる。事実、太平洋戦争末期、多くの青年が特攻隊として知覧から南方へと出撃していったが、日本本土を離れる直前に見えるこの開聞岳を日本の象徴である富士山の姿に重ね合わせて、この世に別れを告げたという。

この開聞岳の裾野に鎮座するのが「枚聞神社」である。社伝によると、かつてはもっと山の中腹にあったのであるが、噴火の度に消失し、現在の位置になったという。この神社が、朝廷側の資料に初めて登場するのは、『日本三代実録』の貞觀2年(860年)の項目であることから、現地では遙か古代から祀られていたものと思われる。『延喜式神名帳』にも「薩摩國額娃郡枚聞神社」として記載された、おそらく畿内から最も遠い式内社である。そのような由緒ある枚聞神社は、鎌倉時代の始めに源頼朝の命で島津氏が薩摩入りするまでは「薩摩國一之宮」であったが、島津氏との関係で、その地位を「新田神社」に奪われた。

枚聞神社で最も注目したいのは、その社殿が靈峰開聞岳をバックに北向きに鎮座しているという点である。道教の世界観の影響を受けて、ほとんどの神社が南向きに祀られている中で、北向きに祀られている神社には、歴史的に何らかの特殊な意味があると考えられる。ヤマトにまつらわぬ陸奥の蝦夷を抑えるための朝廷側の前線基地である常陸国の鹿島の地に、天孫族最



枚聞神社を拝すると、自動的に開聞岳を拝することになる

強の武闘神であるタケミカツチを祀った鹿島神宮の社殿が北面して、蝦夷の人々に睨みを効かしているという話は誰でも知っているが、それでは、この枚聞神社が北面している意味はいったい何であろうか？

おそらく、元々は鹿島神宮とは真逆で、朝廷や幕府と言った「中央」勢力によって「支配」を受けてきた隼人族をはじめとする先住民が、それらの圧倒的な軍事力に対抗するために、強大な噴火エネルギーを持った開聞岳そのものを神として崇めたものと思われる。枚聞神社の「ひらさき」とは、開聞岳の訓読みであることからも、開聞岳そのものがご神体であったことは間違いない。祭神の「オホヒルメムチ(大日靈貴)」は、天照大神の別名とされることからも、彼らのヤマトへの対抗意識が並々ならぬものであることが伺える。

なぜ八幡神社が日本で一番多いのか

島田祐巳[著]

幻冬舎新書、2013年11月刊、295ページ、ISBN 978-4-344-98327-4、929円(860円+税)

評／栗本慎一郎(神道国際学会会長)

著者の宗教学者島田祐巳氏は、1970年代以来、日本の学界、論壇をリードして来た宗教学のエースだった。しかし、80年代に世を世俗的に騒がせたオウム真理教事件において全くのとばっちりを受ける形で大学の宗教学の講座を退かねばならなかった。宗教学にとってまことに惜しいことであった。

しかしこのところ氏は精力的な研究と著作活動で、日本に繁栄する諸宗教の性格およびその民衆への浸透の骨格を分析しておられる。神道はもちろん、その最も主要な分析対象の一つである。その手法は、これまでの日本の宗教学に最も欠けていた文化人類学や民俗学を総合するというものである。いわば歴史人類学を分析の柱とするということで、これが現在、宗教学および歴史学において最も欠けているものであろう。それ故、氏の著作が提起するもの、着目するものは非常に重要なことばかりである。

本書での主要論点は、神社本庁傘下の約8万の神社のうち、二位（伊勢信仰系、約4400）をはるかに引き離して数的な一位に立つのが八幡神社系7800であるということ、そしてこれが『古事記』にも『日本書紀』にも記載されない起源を持っていることだ。傘下約8万と言っても祭神が明確でないものが3万くらいにも上るから八幡神社の数の多さは際立っている。また、八幡信仰は8世紀に突然登場して以来、応神天皇崇拜と習合していきなり高い格が与えられたりしたし、仏教との習合も早く、性格がかなり変遷するところに特徴がある。評者個人としては、この変化に江戸時代の若宮信仰の広がりも分析してもらいたかった。

八幡信仰は八幡神への信仰を柱とする一神教信仰の性格があった。これはその他の神道に比べてある種欧米的というか特殊であるのだが、キリスト

ト教的な面もあり、島田氏はこれが神道全体への支柱のような役割を果たしたものと考えられている。評者はこれにかならずしも賛成でない（そうした支柱がなぜ有効だったか分からぬ）が、各種神社の成立比較において検討されるべき重要な指摘であると考える。

島田氏は結論として八幡信仰は朝鮮半島由来の外来神ではないかと述べられる。これは驚くべき結論である。しかし、縷々述べられる根拠は決して軽く無視すべきものではない。けれどもこれはまだ早すぎる結論であるように思われる。もう少しさまざまな要因を比較検討する必要があるだろう。たとえば、新羅の宗教だけでなく北方アジアの宗教との比較もある。また、非アマテラスという点から見て他のスサノオ信仰とのやや詳細な比較分析も教えてほしい。その点からは、白鳥、鯨、蛇ほかの異類神との比較もほしい。それらは単に説話により人格を模したものであるのか、いささかの疑問がある。

評者は八幡信仰が仏教や天皇崇拜と習合していったから浸透したのではなくて、その前に民衆の精神に根付くものを持っていたからこそ逆に習合「された」のではないかと考えているが、そのあたりもまたお教えいただきたいものだ。

本書は新書であり、その意味で一般向けの本であるのだが、実はきわめて学問的にも刺激に満ちており、神道、神社を考える者にとって重要な示唆に溢れた一書である。



東北大学大学院の講座へ寄付金を贈呈

神道国際学会では、創造性・社会性のある研究活動を支援するために、皆さまの会費を活用させていただいております。この趣意のもと、本年3月、東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座へ50万円を寄附いたしました。この講座の目的・活動について本講座主任である鈴木岩弓教授より寄稿いただきました。

東北大学大学院
文化研究科教授
鈴木岩弓先生



東日本大震災後一年経った2012年4月、東北大学の大学院文学研究科に初めての寄附講座が誕生した。「実践宗教学寄附講座」と言うのがその名前で、これは宗派宗教を超えて宗教的ケアができる高度専門職業人としての「臨床宗教師」を養成するための理論研究と実践研究を行う拠点講座である。

そもそもこうした専門職養成が志向されるようになった原因は、東日本大震災にあった。震災直後から被災地には多くの宗教者たちが組織として、個人

として入り、「心の相談室」を開設して遺族への宗教的ケアと相談業務に対応しつつ被災者支援を行っていた。この活動をもとに東北大学の宗教学研究室を事務局にして「心の相談室」という超宗派超宗教の組織が始動することになった。そこでは情報交換の会議が開かれ、被災地の最新情報を共有すると共に、直接現地に入ってのさまざまな支援活動が宗派宗教を超えて共同して行われてきた。

震災後の時間経過と共に、直接お会いした被災者の心の内を聞く機会が増えてきたが、そこで浮上してきた問題が、被災者とは異なる宗派宗教の宗教者が、そうした被災者に対してどのような宗教的スタンスで対峙したらよいかと言う疑問であった。つまり、今回の被災地は曹洞宗の勢力が強い地域であったが、そうした宗教的背景の中で生活してきた人々に対して、異宗派異宗教の宗教者がケアを施す際、布教とならないよう相手に寄り添うにはどうしたらよいかと言った点が、関わりをもつ宗教者それぞれにおいて大きな悩みとなったのである。

ここでわれわれが求める超宗派超宗教的立場から宗教的なケアのできる人材は、キリスト教国において

ではチャップレンと呼ばれる仕事として既に確立されていた。しかし一神教的色彩の薄い日本にチャップレン制度をそのまま輸入しても実情にそぐわず、結果、われわれ自身で日本版チャップレンを作り出す必要に迫られたのである。その際養成されるべき高度専門職業人の名称も、宗教色が伺える既存の用語を排することでの「臨床宗教師」の用語を造語し、「実践宗教学寄附講座」がスタートした。

講座は東北大学の学生宗教者を対象とし、これまでに53人の修了生を輩出した。彼らは、全国の病院や介護施設のグリーフケアやターミナルケアの現場で活躍し始めている。また「臨床宗教師」養成は、多くの宗門大学からも歓迎され、複数の大学でも養成コースの設置計画が進んでいる。

震災を契機に生まれた「臨床宗教師」という高度専門職業人は、今後、超高齢多死社会の緩和ケア病棟や介護施設に定着させることが課題である。こうした活動に対し、神道国際学会のみなさまからご寄附いただけましたことは、大変有り難いことです。文末になりましたが、心より御礼申し上げます。



講座の機関誌でも本会の寄附について紹介された

ジョン・ブリーン副会長

去年から今年にかけて最も時間をかけてきている研究活動は、（科研費をとった）近代伊勢の調査である。明治期の伊勢神宮、そして戦後の伊勢神宮について日本国内でも海外でも我々の発表を行つた。国内は日文研、京都大学、同志社大学、政策研究大学院大学、京都民俗学会、総合研究大学院大学、そして海外は、ロンドン大学（SOAS）、オレゴン大学、ポートランド州立大学、UCL Aで発表する機会を得た。ついに江戸初期のキリストianがしたためたテキスト『妙貞問答』中の「神道之事」についても学会で報告した。なお、去年から出版した論文等は、下記の通りである。

伊勢
【遷御の儀】首相参列の意味
『朝日新聞』夕刊(2013年10月23)

アレキサンダー・ベネット理事

昨年から出版した著書および論文は以下の通りである。

Japanese Culture - A Comparative Analysis of The Chrysanthemum and the Sword and Mirror form Americans: Japan" (日本文化論再考: 美国人による菊と刀と鏡の形態) (1930).

菊と刀とアメリカの鏡・日本との比較分析)と題する英語講演を行った。この講演には、同校の日本文化研究所をはじめ大学院生や学部生が集まり、1時間の講演のうち、参加者による熱心なディスカッションが繰り広げられた。

三宅善信理事長

三宅善信理事長は、2月22日に神戸国際大学で開催された同大学経済文化研究所主催の第29回公開講座『死を見つめる心(死んだらどうなるのか)』において、「天地の間」という自然観・遺体から伝子まで』と題して90分間の講演を行い、300名の受講者に神道的な自然観・死生観について、世界の他文明と比較してみせた。

3月6日には、南山大学で開催されたWCRP日本委員会主催の平和大学講座でパネリストを務め、「Welcoming the Other」という昨年末にウイーンで開催された第9回WCRP世界大会のテーマについて分析した。

3月17・18両日には、ローマ教皇の離宮カステルガンドルフォにあるフォコラーレ運動世界本部で開催された諸宗教対話シンポジウムに出席し、「Religions for Peace」という題で英語でプレゼンテーションを行った。

4月4・5両日には、英国のバーミンガム大学で開催されたIARFという国際NGOの評議員会に出席し、本年八月に同地で開催される第34回IARF世界大会に向けた準備を行った。

その他にも、4月11日に明治神宮で斎行された昭憲皇太后百年祭に北白川道久神社本庁統理らと共に招かれ列席したのをはじめ、多くの神

紹介

『伊勢の神宮御装束神玉』
南里空海、世界文化社、二〇一
四年、二五二〇円

『伊勢神宮・水のいのち、稻の
いのち、木のいのち』
稻田美織、亜紀書房、二〇一三
年、二三一〇円

『生田の杜とミナト神戸の事始
め』
加藤隆久、戎光祥出版、二〇一
四年、一四七〇円

『鳥居』
谷田博幸、河出書房新社、二〇
一四年、二六〇〇円

『図解神道としきたり事典』
本人なら知つておきたい!
茂木貞純・監修、P.H.P.研究所
二〇一四年、一六〇〇円

『神社と神様がよくわかる本』
藤本頼生、秀和システム、二〇
一四年、一四〇〇円

『女神の聖地伊勢神宮』
千種清美、小学館、二〇一四年
七四〇円

『皇道仏教と大陸布教』
争期の宗教と国家』
新野和鴨、社会評論社、二〇一
四年、二九一六円

『神社の起源と古代朝鮮』
岡谷公二、平凡社新書、二〇一

編集後記

国際的な「自然環境シンポジウム」が伊勢を舞台に開催され、

前号に続き伊勢神宮が焦点となつた。神道は、これまで環境問題について必ずしも大きく貢献してきたとは言えないが、このシンポをもつて一つの転換期を迎えたことになろう。他、連載もの、香取神宮の神幸祭もありあげた。読者の皆さんのご感想をお待ちします。(JB)

〔女神の聖地伊勢神宮〕
千種清美、小学館、二〇一四年
七四〇円

新里和順著『社會論』一〇一
四年、二九一六円

お詫び・訂正

神道フォーラムV0-148(平成26年2月1日号)の「神社巡り①」は「神社巡り②」の誤りでした。ここに訂正して、読者の皆さんにお詫び申し上げます。(編集室)

株式会社アドバンスの取り扱い

◎これが却て型行動を上回るほど多く、それはどこで誰が、また

◎いつも社報や刊行物をお送りください、ありがとうございます。

会員(年会費)	3,000円
会員(年会費)	10,000円
人会員(年会費)	100,000円
賛助会員(個人・一時金)	30,000円
賛助会員(団体・一時金)	500,000円

NPO法人 神道国際学会 〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F
Tel. 03-6805-7729 Fax. 03-6805-7769 info@shinto.org